

三脚物語〔第七回の上〕

江 鷗

風化した古生層の岩石などが、ゴロ／＼轉がつて、立ちながら

『山岳』といふ雑誌の五年第二號『四方山話』に『畫家の使用する三脚といふものは畫家に限らず、床に代りとして登山旅行に携へるのに、最も輕便で必要なものである、それも體裁などは構はないでいゝ、輕くて丈夫でさへあればいゝ、私は友人O氏の好意から贈られた三脚を持つてゐる、樫で製したもので、長さはものさし位、革で三本の繋ぎが留めてある、重味は金剛杖一本にも匹敵しない、去年の夏、富士登山に、初めて使用して經驗した、恰度、寶永火孔底に下りた時だ、火孔底の全部は、角張つた焚石の缺片に埋められて、踏むのも痛い位であるから、尻などは到底掛けてゐられない、そのとき三脚に腰を据えて、悠／＼火口壁の、模様を觀察したり、記帳するところが出來た、大山岳の連嶺になると、



小豆島坂手海岸

大下藤次郎筆

手帳を取出すやうな目に遇はされるのであるから、三脚はヤハリ必需品である、只景色を見てゐるばかりでも、土や石の上へ、直に据はつて眺めるより、いくら心持かいゝか解らない、それに記帳でもするときは、立ちながらゐるよりも、身體が動搖せず、にびつたりと落ちついて、膝の上にも置けるので、具合がいゝ、山の輪廓などを、成るべく正しくスケッチしやうと思ふときには、勿論のことだと思ふ』と書いてある、此文字は、誰あらう山岳旅行で有名な鳥水先生の筆になつたもんだ、僕等も、このやうな立派な方々の裏書を得たのは何と誇るべきぢやアないか。さて、今度から僕の昔話を初めるつもりでゐた處、急に諸君に報すべき出來事が起つた、それは小豆島行で、新聞にも出たし、また單行本にもなつて近々出版されるから、大よその處は解らうが、僕等てなけりや見る

ことも聴くことも出来ない珍聞は、世間に知れてゐない、これを大急ぎで吾が『みづゑ』愛讀の諸君に、極内々にお披露申上やうといふのだ。

二

十和田から田澤に廻るといふので、大曲の宿に泊つた時、東京から主人へ手紙が来た、小豆島へ往く事に極まつたから早く歸つて来いといふのだ、それが爲め僕も急に東京へ歸ることになつた。

天長節の朝新橋へ運ばれて赤帽の手に渡された、見れば満谷、高村、吉田、鹿子木、小杉、石井、中川の諸先生、毎日電報の牧野氏など旅装甲斐々々しく待合室に居られた、小杉先生と僕の主人は京都迄の委員で、切符だ荷物だと奔走してゐられた。網棚の上では諸先生の三脚君にもお目にかゝつた。棚から見下してゐるのも至極妙だ。

腰掛の下から革鞆を引摺出して、其上でトランプが始まる。新聞を見るもの、雑誌をよむもの、スケッチするもの、彌次もの、中々盛むだ。A先生は米原をマイブラコメハラと讀むて皆んなから笑はれる、急行券を返りの切符かと思つたのも此先生で、汽車教育といふ言葉が出来る。B先生は態々席を移して、車中の美人の顔を飽かず眺めてござる。但、これは悪い意味にとつてはいけない、此先生は人物畫もおやりになるのだから屹度その研究なシだらう、さて〜御熱心なものだ。

三

京都に着いたのは夜だつた。可なり長い間俣に乗つて、やがて下されたのは三條の萬屋とかいふ家だ、例によつて二階の床の間に安置される、席には京都の都鳥、寺松、伊藤諸先生、それから當時御滞在中の河合先生も居られる、ガヤ〜ベチャ〜、何が何だかサツパリ解らない、大勢の聲は一團となると蜂の唸るやうなものだ、自然の催眠歌だ、よい心持だ、先生達は何時寝るのだから知れたもンぢやアない、お先へ御免をと思つてゐると、お仲間が二三本そばへ来て新京極へでも一しよに往かうといふ、僕は十何年前にこの邊を歩行いた事がある、京都の町は舊態依然たるもンだ、よし御案内申さうと出掛けたが、間もなく連れの三脚君は何處へか雲かくれをしちやつた、コツチは迷兒になる氣遣はないが、先が氣がかりだ、群集を押分けてヤタラに急いだ、京極を抜けて四條の通りへ出る、此夏僕の來た時は、醫者が辯護士だけだときいたゴム輪の俣は、可なり多く目につく、どれもこれもニッケル細骨のピカ〜光つた奴ばかりだ、まだ開けないアと思ひながらいつか四條の橋へ來た、橋の袂には廣告燈がヤタラに建つてゐる、その一番大きい奴がダシメケにピカツと光つたので驚いて目を開いたら、何の事だ、矢張もとの床の間に居て、座敷ではいま寫眞を撮つたらしく、白い煙りが濛々と天井を這つてゐた。

四

よく正夢といふことがあるさうだが、寫眞が濟むとそこらを散歩しやうと誰れか言ひ出す、もう十一時過だといふ人がある、

新京極迄往つて見やうといふ先生がある、とうとう不殘出掛け
ことになつた。宿のドテラに白金巾の帯、鳥打を冠つての勢



大 下 藤 次 郎 筆

小 豆 島 大 部 海 岸

揃ひだ、其ドテラたるや、太い萌黄の糸でヤタラに綴ぢてある
代物だ、夜ではあるがよくあれで歩けたものと感心する。一時間
ばかりして歸つて来たのは、主人の外に二人だけだ。撒いたの
だか撒かせたのだから、とに角僕の夢によく似てゐる。更に二時
間ばかり後に迷兒の連中も歸つて来た。ヤツチヨロマカセのヨ
ヤマカセとかいふ踊りが素敵に面白かつたと、C先生は頻りに
手真似をしてござる。あいつは菩薩ぼつ面だとD先生が仰しやる。
いつの間にか鼾の聲がする。D先生のあたりで何やら寢言をい
ふ。C先生は何と思つたかスツクと起つて、寢床を一廻りして
まともぐり込むて了つた。

五

ガラ／＼と雨戸が明くと、東山がぼうつと霞むで、朝日がガラ
ス障子の間からさしこむ。一同睡むさうな眼をこすり／＼頭を
もちやげる。ゆうべ夜中に起きたのは誰だといふ、C君だ、何
でも踊つてゐたといふ、證人があちらからもこちらからも出る、
とう／＼踊つたことにして了つた。

朝飯が済むと、僕等は置いてけ堀の、一同關西美術會の展覽會へ
出かける、十時には歸つて来て、更に七條の停車場へ繰込む。

鹿子木先生が残つて河合先生が加はつた。石井先生は一足お先
に大阪へ往かれた。今度の汽車は急行ではないからノロいけれ
ど、車中は買切同様、またもトランプで賑やかだ。

一時過に神戸に着いて、中央旅館といふ家に預けられた。先生
達はこれから須磨の住友の別荘へゆくのだといふ、お供はスケ

ツチブツクの君だけだ、僕等は神妙にお歸りを待つてゐた。

暗闇を俾て運ばれて、大きな船に乗せられ、美しい部屋に置かれたのは六時過だつたらう。ドアの間から見ると、細長い大提灯に大井川丸と筆太に書いてある、鄰りのサローンには先生方の聲がする、風も無い穏やかな航海だ。

不圖見るとベツトの上にスケッチブツク氏が居る、馴染は薄いが同じ主人に仕へてゐる身だ、今日はどうかだつたととき、氏の話によると、中央旅館を出た一行は、まづ神戸の精肉をといふので、キヨロく見廻したがそれらしい家が無い、終に辻待の車夫にきいて、お上サンのぼりはゾロくと三ツ輪とかいふ大きな牛屋へ上る、一同腹は空いてゐる、人は多くて鍋は小さい、火がトロい、よく煮へる迄待遠しい、肉の奪合が始まる、松茸を箸で押へて、コレは俺れのだと生なまの内から所有權を主張する、中々大騒ぎであつたさうな、それから電車道へ出たが、停電でいくら待つても來ない、果物屋の妻君にきくと、兵庫の電車迄四丁ですといふ、四丁位みならと歩み出したが、四丁處か十五六丁もあつて大汗になつた、須磨寺といふ處で電車を下りて住友家へゆく、臘引の床板に危ふくもスリッパを這らす先生もあつた、名家の繪を見て、御茶やお菓子の御馳走になり、海を見晴らしの庭で寫眞を撮つて夕刻歸つたのだといふ。

六

サローンでは話がはづむでゐる。E先生は船に弱い人で、前から心配してゐたが、平穩無事の航海に、いよく酔はぬものと

自信が出來たから、當るべからざる氣焔で、僕は瀬戸内海なら船長になるなんて言ふて力むでゐられる。商船會社からは岡本氏とやらが接待のため同乗されてゐる。他の船客を斷はつて、一等室全部先生達の爲めに明けてくれたのだ。事務長やスチュアーの聲もする。石井先生の聲もする。大阪から乗られたんだらう。酒が始まつたらしい、御馳走も並んだやうだ、ナイフやフォークの音もするから洋食も出たのだな。此船は一時間何哩走ります、ノットとマイルはどう違ふのですなど、そろく汽船教育が始まつた。何れも御機嫌の様子で、誰れも自分達の部屋に入るものはない。

畫貼が出たらしい、唐紙や、色紙や、短冊も出たやうだ、柏亭、未醒兩畫伯は、さぞ健筆を揮うことだらう。満谷先生はキツト自畫像が出るね、吉田先生は富士さ、高村先生はタンポ、かな。

天井の上でポー——と汽笛が鳴る、着いたたと窓から見ると、闇の中を燈火が二三點見える。船の進行が止まると、ボーイが來て僕等を右舷につれてゆく、鐵の銷に凭れて港の方を見ると、ガヤンと人聲がして、紅提灯が二三十浪にゆれてこつちへ向つて來る、先生達の歓迎船だ。洋服の人、袴羽織の人、法衣を着けた人も居た、一丁ばかりのハンケで坂手に上陸、鹿島屋といふ家に入る。ちらりと見た店の時計は十二時を過ぎてゐた。

七

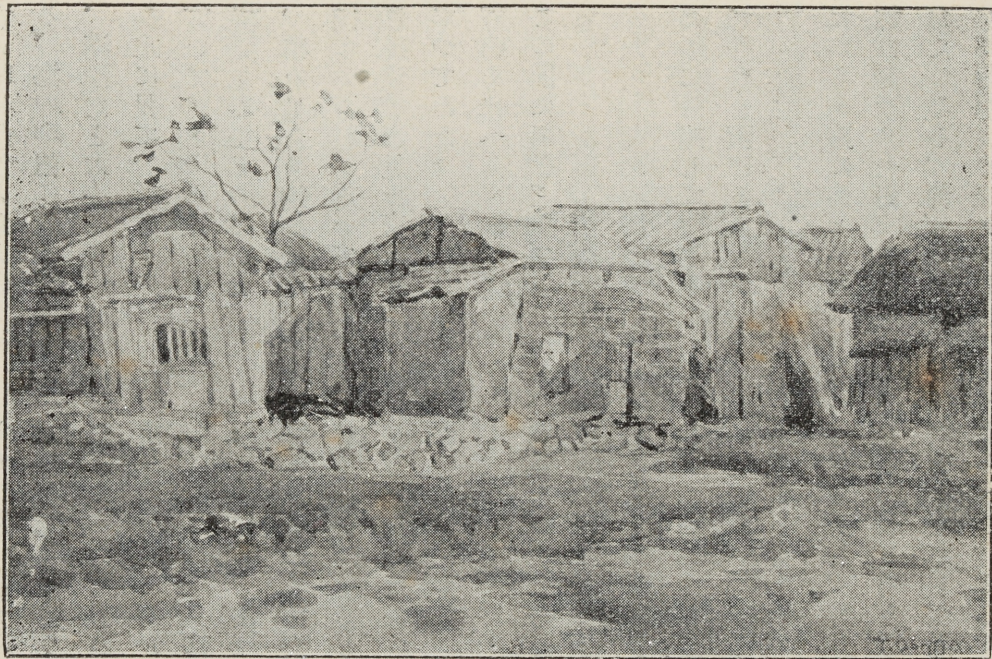
鹿島屋では荷物は入口の物置めいた處へ積まれたが、僕だけは

チブックに寫してゐる。

幸主人の手に持たれた、め二階へ一しよにゆくことが出来た、八疊に六疊二間押開きで、家も新しいし座敷も立派だ、アセチリンがキラ／＼輝いてゐる。一同が上座に並ぶ、接待掛や有志の面々が下座につく、一々挨拶が始まる、何やら言ふては頭を下ること數十回、中にはだん／＼尻込して、隅の方、人の背中にかくれて、挨拶の儉約をしてゐる先生も見えた。それから島の話がある、酒が出る、睡むさうな目をする、四五人は別れて前の宿へゆく、床が敷かれる、例によつて例の如して、寢静まつたのは二時過であつたらう。

朝になつた。一番先に起きたのは主人だらう。やがて窓が開いた、海は目の先で、島が見えたり舟が見えたり、縁側の方には突兀たる岩山で、その下は段々畑の、景色はどちらを見ても面白い。主人は朝湯と洒落れ、

ホテつた顔を風に吹かせながら、直ぐ下の地引網のさまをスケ



小豆島鹽漬の家

大下藤次郎筆

そのうち一同起きる、分宿の人達も来る、今日は是から神懸山見物をするのだといふ、繪は描かないといふので、吾々はお供が出来ない、何も重いといふ程のものぢやなし、連れていつてくれ／＼ばよいにと思つたが何て間が悪いんでしよといふて見ても詮方がない。様子はスケッチブック氏からあとで聞くことにして待つてゐた。

諸先生達が出發してから、程なく僕等はE先生の素敵に大きなトランク君や、手鞆君、毛布君など、共に、荷車のお客になつて、草壁下村の東橋庵といふ宿屋へ運ばれた。荷車の上とは申せ、道がよいので氣樂なものだ。天氣も馬鹿にいい。濱通りを離れて數町、右に切通のやうな所を抜けると、内海の景色だ。そこは古江とよばれて、下村行の舟の出る所で、二三十軒家がある。この邊から

神懸山を見ると、岩石の形も面白く、朝の故か色も悪くはない、

海は直径一里ばかりの圓形に見えて、まるで湖水のやうだ。左の方に突出た岬には松が茂つてゐる、右の岬は龜浦とかよばれて、明るい茶色の岩が朝日に輝いてゐる、海の半程には小さな島がある、潮の干た時は一つになつて、満潮だと大小三つになる、辨天鳥といふのだ。それ等の景色を左に見て、暫らくゆくと苗場といふ處に出る、こゝは苗場と書いてノーマと讀ませるさうだ、立派な家が澤山ある、名物の醬油もこゝで出来るといふ、觀月亭とかいふよい宿屋もある、田を見たり畑を見たり、鹽田を見たりしてゐるうちにいつの間にか下村へ着いて、宿の二階の六疊に押上られた。此邊の人達は僕等を見た事か無いかして、頻りに弄りものにして不思議がつてゐた。

四時頃にドヤ／＼と皆んな歸つて來た。着物を代へるもの、湯に入るもの、一しきりは中々の騒ぎだ。この間にスケッチブック氏に逢つて今日の様子をきく。

八

ブック氏の話では、古江から一行は二艘の船に分乗して中海を渡つた、下村に上陸後は、暑いといふので外套を預ける人もある、靴では困難だときいて俄に草履や草鞋を徴發する人もある。細い流れに沿ふて數町ゆくと上村で、それから山路にかゝつたが、道は悪くはない。C先生は一行中の輕口無駄りや野次の親方で、銘々をいろ／＼のものに見立て、喜んでゐる、何でもE先生の長髪に茶色の外套から考へて、支那の留學生の張サンだといふ。A先生を西洋の按摩、即ちマッサージにして仕舞ふ。F

先生は昔しから村長サンといふ名があるから、これは其儘で、主人は黒い帽子に長い外套、其後ろ姿から鑑定して宣教師の稱號を頂戴したやうだ。J先生は布哇歸りだと極まるし、H君は通辯さんに見立られたさうな。

掛茶屋のある處から、段々急になり道も細くなる、岩山は直ぐ前に近くなる。紅雲亭といふのに一同休む、こゝで神懸餅に始めて逢つて、舌鼓を打つた下戸先生達も居た。

種々なムヅカシイ名のついた岩が右にも左にもある、成程見れば不思議で珍らしいが、主人は感興が起らぬかして、一向ブック君を開かなかつたさうだ、但し、老杉洞といふ奴は取わけ立派であつた、め、諸先生方はコレはよいと大に氣に入つたらしく、こゝでは言ひ合したやうに寫生帖を出したが、主人は不相變他人の描くのを見てゐる。

この邊から上は道は可なり急で、靴の御方は御難澁の様子だつた。苗場の觀月亭から運んで來た御料理の荷物や、紅い禪の美しい姉さん達と、後になり先になりして、四望頂といふ平地に着いたのは一時頃だつたらう。

四望頂は、字の如く眺望のよい處で、南は内海から四國の山々も見えるし、外は播州路を遠見にして、近くは大部の辨天鳥など手に取るやうで愉快な場處だ。こゝに大きな四阿があつて、紅白の幔幕を引廻し、お辨當やお茶の御馳走がある、皆んな愉快さうな、そして寒さうな顔をしてゐる。名物の蕎麥も出て、三四杯お代りをした先生もあつた。F先生は、昨日神戸で牛肉

の競食が崇つて、今日は大に元氣が無い、食事も進まぬらしく、苦い顔をしてござらツした。

一時間程して一同は四望頂を出發、東の石門をくぐつて神懸焼を見物し、それから大急ぎの漸く只今歸着したのだとブック氏は息をもつがず語られた。

セイヌ河畔

T O 生

巴里のセイヌ河は、丁度東京の隅田川大阪の淀川のやうなもので市の中央を流るゝ大きな川である。川には一錢蒸氣が盛んに動いてゐる、また下等の風呂船などもある。橋ては博覽會紀念に架せられた歴山三世橋が廣くつて立派である。上流は紳士の別荘などがあつて景色のよい處が多い。

川上に向つて右は巴里の繁華な大通りで有名なオペラも遠くはない、凱旋門も直ぐ近くである。歴山三世橋の袂には、大サロンの會場なるグランパレーがある。市で買上た美術品の陳列場たるピツチパレーもある。少し下るとルーブル博物館が岸に臨むて巖として、控へてゐる。それより猶下ると市廳がある、こゝの壁畫は大したものだ。ノートルダムは、下流の島のやうな處に高く中空を摩してゐる。左岸はナポレオンの墓所やエツフェル塔などあつて、丁度ルーブルの對岸あたりに美術學校がある、世界の美術家はこゝに種を撒き發育するので、實も生らざに枯れてしまふのも少なからぬことだらう。口繪にある河岸店は、美術學校の在る近處、セイヌ河の岸堤防用の石垣の上に並ん

であるさまざまの店で、大きな箱の中に商品がある。黒い着物の女や白い髯の男が番をしてゐる。古錢もある、小道具もある、併し重に書物で、古いカタログなどよく日に晒されて表紙を反らしてゐる。香氣な巴里人は勿論遊覽の外國人も皆足をとめる。中村不折君は、留學中は學校の往復には屹度立寄つて、掘出物がなにかと目を皿にしたものだ。

床店は夜になると箱の蓋をして錠を下し、番人はテントの家へ歸つてしまふ。

床店の並むでゐる石垣の後ろは海岸になつてゐて、一間程の道がある、人があまり通らぬから川や橋の寫生にはよい處である。先年三宅克己君がこゝで寫生してゐたら、石垣の上から紙屑など投つて困るので日除傘をさした、するとイタヅラ小僧が、上から傘の石突を擲むて宙に吊したといふ話もある。

寫生地案内

三 脚 子

東京を中心として、一日で往ける位ゐる場處の寫生地を、毎號御案内いたさう

冬は自然界の活動の休む時であつて色彩の變化が少なく、又東海道方面は好晴の日は續くから、五日一週間と一つの繪の寫生をなすのに都合がよい。たゞ此季節に於て、戶外寫生に困難を感ずるのは、寒氣と強風とである。

冬の日の感じは、弱いけれど落ツキがあつて、穩やかな繪が出来る。寫生地としては何處でも面白く、雪の景などは此季節に